道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

スタッフ美多さんの手作りウチワでゴールのみんなをお迎えしてたエミコちゃん（右）と私。

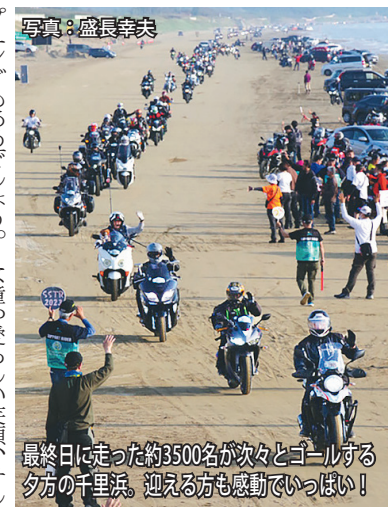
三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～ http://www.fairytale.jp/ ～

11年目に入ったバイクイベントSSTR（サンライズ・サンセット・ツーリングラリー）が、今年も5月末に開催されました。当初は、太平洋側のとある地点を日の出と共に走って日の入りまでに石川県の千里浜に集うというワンディだったのですが、コロナ禍で大きくルールが変わり、今年は9日間のどこか1日を選んで走るというロング開催。クリック合戦を制した幸運なライダーは、1万2千人（応募は3万6千人！）。能登半島といえば5月5日にマグニチュード6・5の地震があり、最大震度6強を観測した珠洲市では500棟近い家屋が被害を受けたばかり。当初はどうなるのか不安でしたが、宿泊施設や道の駅や飲食関係などから次々と発信される「大丈夫ですよ」「○○の道は開通しました」「どんどん来てください」コールに背中を押され、殆どの人が当初の予定で動いてくれたようです。迷惑にならないように訪問し、できれば珠洲市界隈でお土産買おうというライダーたちは、SNSで情報交換していました。天気もほぼよく、余震もなく、「ほっ」。むしろ近隣居住者だけに限られる災害ボランティアを、主催者風間深志氏（オートバイ冒険家）が行っている「日本応援ツーリング」登録者に限り日本赤十字と組んで活動できるなど、今回は東日本大震災時からずっと人的支援を行っている彼の社会貢献がさらに大きく実ったようでした。「走ることでその地域を知ってお金を落とす」「日本中を故郷にする」「個人ができることをする」「それぞれの夢を実現する」。各地から集まってくるライダーの勇姿やボランティアの様子はテレビや新聞などのニュースでも大きく取り上げられたのは、ライダーとしてとても嬉しいことでした。

アンバサダーとして毎回参加している私は3日滞在し、改めてゴールする人や応援してくれる地元の方々の熱意を感じ、一人一人の感動を知る機会に多く恵まれました。エントリー後に難病宣告されたけれどキツい治療を受けてなんとか治し、無事に参加できた人。そのゴール時の夕日の写真を見せてもらったら、「生きているって最高だね！ 諦めなくてよかったね」と、言葉にはならないけれど、胸がとても熱くなりました。人生で初の冒険という方もたくさんいました。若い人もそうでない人も、みんな何かを抱えて生きています。SSTRはレースではなくツーリングですが、時間を作ってお金を貯め、地図と睨めっこしてコースを組み立て、整備や装備など入念な準備をしてその日を迎えねばなりません。自然相手なので、ハプニングもあるでしょう。

写真：本多茂悦
1982年のパリダカ完走マシンを初めて走らせた風間さん。2017年に完走した息子の晋之介さん、ゲスト菅原照仁氏の日野カミオンとデモ走行する日が来るなんて！

自転車世界一周のラストに向けてトレーニング中のエミコちゃん。今回は35年ぶりに250ccとカブでリターンを果たして大喜び。


写真：盛長幸夫
最終日に走った約3500名が次々とゴールする夕方の千里浜。迎える方も感動でいっぱい！

人との出会いも多くて楽しいけれど、時間を計算しながらゴールを目指すその感じは、まさに挑戦。走っている時に思い出すであろう人や出来事が背中を押すことも多く、それぞれ何かの集大成であることは間違いありません。一番多いのはソロですが、夫婦や親子、障がい部門での参加など、カタチは様々。走った11769台のうち、女性が1068台というのも凄い数ですよね。

実は今回の大きな目的のひとつは、今年2月号でも紹介した自転車冒険家のシール・エミコさん（オーストラリア在住）との再会でした。自転車での世界一周目前の23年前に子宮がん宣告され、再発すること数回。11年前にオーストラリアに渡り、膀胱・肛門・骨盤内全摘手術をして、現在は2つのストーマを持って暮らしているのですが、ガンはついに消滅。そこまで再発して生き残った例は稀有で、彼女がこれから伝えていくべき多くのことを、私も莫大な贈り物として受け取りました。病や困難とどう向き合うべきか、何をチョイスするべきか。壮絶な治療の末に掴んだ命は、宝石のように輝いていました。「生きててくれてありがとう」と何度呟いたことか。彼女の吸い込まれそうな瞳や愛らしい笑顔、そして愉快な会話は、触れ合った人が全員メロメロになってしまう魅力があり、もれなく自称応援隊になってしまいます。「山は越えられる」「自分を信じて動く」「想いは勝つ」「夢がエネルギー」いろんな言葉が浮かぶけれど、とにかく生きるために我々はいるのだなと教えてもらいました。生きていればまた会える。また会うために丁寧に日々を送ろうっと。

エミコちゃんやスタッフや仲間と別れて会場を去ったのは、出走最終日（土曜）の日没2時間ほど前でした。のと里山海道や北陸自動車道を走っていると、反対車線に次々とヘッドライトをつけた参加者のオートバイが次々とゴールへ向かって走って行きます。数十台？ 百台？もっとかもしれない。どこまでも繋がっているその姿が、大好きな映画「フィールド・オブ・ドリームス」のラストシーンと重なり、思わず鳥肌がたってしまいました。千里浜にあるのは、オーロラのように煌めくそれぞれの夢。手に取ればまた次へと向かいたくなってくるのでしょうが、今日は本当におぜ疲れ様。ゆっくり休んでください～いと声援を送り続けていました。SSTRロスになるほどの〝心の旅〟でした。

九州の散歩道
社会や生活を支える「港湾道路」

フリージャーナリスト　湯浅玲子

福岡市では7月に「世界水泳選手権2023」が行われます。当初は2021年に開催予定でしたが、新型コロナの影響で2年も開催時期が延期されました。やっと開催される世界水泳福岡大会に向けて、市内各所では会場準備が進められています。

大会会場は既存施設を利用しながら、仮設プールなどを設置して対応する方法がとられています。世界で初めて国際公認の仮設プールを導入したのは福岡市で、2001年の第9回世界水泳福岡大会でのことでした。今回もいくつかの仮設プールに加えて、2013年から競技種目に加わったハイダイビングの飛込み台も海岸に建設中。高さ約30mの飛込み台はビルの9階ほどに相当するそうで、砂浜に突如出現した巨大な飛込み台はなかなか壮観です。

世界水泳の会場は、いわゆる港湾地区と呼ばれる地域に多く点在しています。この港湾地区、普段はあまり一般の人が立ち入らない地域だと思いますが、私たちの社会や生活を支えてくれている重要な場所です。物流拠点として国内はもちろん世界中からコンテナが集まり、それを運ぶトラックなどが常に行き来しています。貨物だけでなく旅客ターミナルもあり、新型コロナの影響で中断していた海外からのクルーズ船も寄港するようになりました。福岡市は150万人を抱える商業都市ですが、港湾部には水産物を取り扱う魚市場や工業地域もあります。小さいながらも造船所があって、日々新たな船が建造されています。

地域の自治体が管理している港湾地区では、一般の街区では難しいことも可能になったりします。例えば映画やドラマの撮影があります。カーチェイスのようなシーンを一般公道で撮影するのは無理ですが、自治体の許可を得て港湾地区の道路を封鎖して行えば可能になります。福岡でも映画やドラマなどの撮影が港湾地区でたびたび行われてきました。

私のいちばんのお気に入りは港湾地区を走る都市高速道路。天気のいい日には青い海と空の景色が爽快で、途中に見える福岡タワーやペイペイドームなどのランドマーク、さらには魚市場や造船所の様子も人々の生活を垣間見るようです。福岡市は博多湾に面した北部以外は山に囲まれた地形なので、今後も都市が発展していくためには沿岸部をうまく活用していくことがとても重要です。世界水泳で身近になった港湾地区が、さらに活気ある地域になるといいなと思います。

（写真提供：福岡市）

さまざまな施設がある福岡の港湾地域
PHOTO：Fumio Hashimoto

港湾を通る都市高速道路の美しい曲線

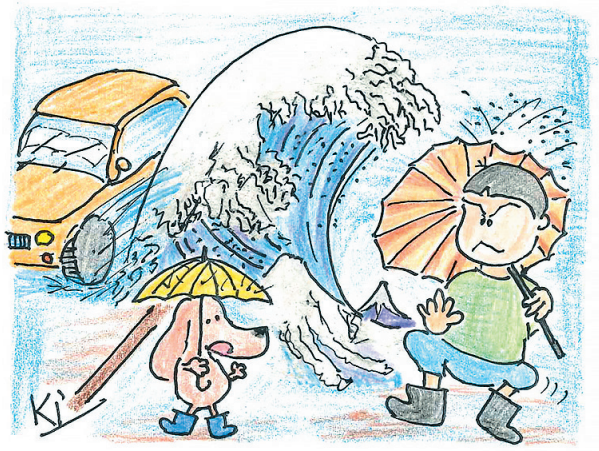
ハッと思いました

早々と台風の影響で全国各地に大雨が降り、梅雨入りも例年に比して早い日本。天気予報が聞き逃せません。

六月は水無月と言います。雨が降るのに水が無い月とはどういう事だろうと思ってはいたものの、この歳になってポチッとググってみたところ、「無」は連体助詞「な」＝「の」で、水の月と言うらしく（詳しくは国語辞典で・・私にはちんぷんかんぷん）、水無月は田んぼに水を入れる大事な月、と言う事でした。六月の雨は大地にとって必要な雨なのですが、多すぎても困ったものです。昨今の降雨のスタイルは農業だけでなく、生活環境や交通状況にも大きく影響しています。

降雨時走行のドライバーとしては、スリップ、視界不良、歩道・歩行者への水撥ねに一層注意して運転して欲しいですね。安が拭えない私です。

タイヤが隠れるほどの水位なのに、一気に突っ込んで立ち往生しているクルマがいます。排気口が水の中にあれば、どうなるかぐらい想像できると思いますが、不思議です。近頃増えてきたハイブリッド車やEV車は、モーター、大型大容量のバッテリーが肝ですが、電気と水を考えると、大丈夫なの？と不安が拭えない私です。

なんだかんだ言っても、雨は降り、大地を潤し、夏になる。すると、三年間自粛していたイベントが復活します。人の出もクルマの出も予想を上回るでしょう。

今、幼稚園や保育園、公園の子供の声、田んぼのカエルの鳴き声、除夜の鐘、緊急車両のサイレンが五月蠅いとか。路上では煽った・邪魔した・クラクション鳴らしたと難癖をつけて所かまわず妨害・嫌がらせをするなど耳を疑うクレームが横行中。今年の夏は花火大会の花火と蝉の声が五月蠅いも追加されるでしょうね。